

# 中学生の友人関係におけるコミュニケーションとサポートの授受,

## 適応感に関する研究

22424068 河田奈津子

主査教員 安藤美華代

副査教員 山本力・東條光彦

### 問題と目的

思春期に、友人と相互依存関係を形成できるか否かが思春期の適応にとって重要(皆川, 1980)と言われているが、思春期に安定した友人関係を築くことは容易ではない。困った時の対処として、友人に相談することは、精神的健康にとってもサポートを得るためにも重要であるが、平成23年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(文部科学省, 2012)では、いじめられた生徒のうち、小・中学校でともに8%程度の児童生徒が誰にも相談できていなかった。

従来調査においては、児童生徒が相談できない理由や、どうすれば相談できるか、サポートを受ける立場からの研究は多くなされている。しかし、サポートする側から、サポートを受ける側との関係性について検討した研究は少ない。よって、本研究では、中学生が友人の相談にのるまでどのように関係作りを行っているのか探索的に検討する。探索した結果を参考に、中学生の提供しているサポートと受けているサポート、普段のコミュニケーションが、学校適応感にどのように関連しているか検討を行うことを目的とした。

### 研究1

**目的:** 友人の相談にのる中学生は、相談相手とどのようなコミュニケーションをし、どのような関係性を築いているか探索的に検討する。

**方法:** 公立中学校1~3年生20名に、約30分間の半構造化インタビューを行い、①普段の友人とのやり取り、②友人関係で困った時の対処、③相談する状況と相手、④相談された経験の有無、⑤相談された際の感情について尋ねた。インタビューを逐語化したものを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下, 2007)を参考に、

「友人の相談にのったことがある」と答えた13名(男子6名,女子7名)について分析を行った。分析焦点者は「友人の相談にのったことがある中学生」とし、「中学生における友人の相談にのるプロセス」について分析を行った。

**結果:** 【】はコアカテゴリ、《》はサブカテゴリ、<>は概念を示す。44の概念、【友人とのつながり】【日常的なコミュニケーション・活動】【関係を維持・深化するための工夫】【友人の相談にのる】の4つのコアカテゴリが生成された。友人の相談にのったことのある中学生は、日頃から多様な友人とつながりを持ち、普段から様々なコミュニケーションや活動を通して友人関係を維持・深化する工夫を行いながら信頼関係を築いていることが示された。このプロセスを通して、友人との親密性によって抱く気持ちや対応は様々ながら、親密性の程度に関わらず友人の相談にのっていることが示された。

**考察:** 中学生が友人の相談にのるまでには、普段から情報の交換をするなど、お互いにとって些細でも有益なやり取りや、友人関係を調節するための工夫を行い、信頼できる関係を成立させることが重要と示唆された。

### 研究2

**目的:** 中学生の友人とのコミュニケーション・活動、友人への感情・欲求、サポートの授受が、学校適応感とどのように関連しているか明らかにする。

**方法:** 公立中学校1~3年生848名に自己記入式質問紙調査を実施した。実施期間は2013年11月。質問内容は、①友人とのコミュニケーション・活動: 友人との活動、友人に対する感情、友人への欲求の質問紙(榎本, 2003)から11項目、自己

開示質問紙(榎本, 2005)から3項目, 研究1の結果から6項目を加えた20項目。②友人への感情・欲求: 友人との活動, 友人に対する感情・友人への欲求の質問紙(榎本, 2003)から8項目, 研究1の結果から7項目を加えた15項目。③友人間でのサポートの授受: 学生用ソーシャル・サポート尺度(久田・千田・箕口, 1989)の中の15項目を, 相手は「身近な友人」とし, 提供しているサポートと受けているサポートについて尋ねた。④学校適応感: 青年用適応感尺度(大久保, 2005)の30項目を「学校生活において」どの程度当てはまるか尋ねた。①～④を4件法で尋ねた。回答に不備があった10名を除き, 782名(男子401名, 女子381名)を分析対象とした(有効回答率92.2%)。

**結果と考察:** 各質問項目群について, 因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。①から「愚痴・対人場面の話」「相互理解」「部活動関連」「学業情報交換」の4因子, ②から「信頼・親しみ」「依存欲求」の2因子が抽出された。③は「提供しているサポート」「受けているサポート」をそれぞれ1因子構造とした。④から「居場所感」「被信頼感」「充実・充実感」「劣等感のなさ」「将来への希望」の5因子が抽出された。 $\alpha$ 係数は.61～.95でいずれの項目群においても適度な信頼性が示された。そして, 各項目群を構成する項目の合計得点を項目群の得点とした。

各項目群における性差・学年差について検討を行ったところ, 学校適応感の5つの項目群には有意な性差がみられなかったが, それら以外の項目群では女子の方が有意に高かった。学年では, 「信頼・親しみ」, サポート授受, 「被信頼感」「充実・充実感」「将来への希望」において, 2年生が1年生および3年生より有意に低かった。これは従来の研究で報告されている, 中2に向けて適応が下がるとの結果と一致するものであった。

次に, 友人とのコミュニケーション・活動, 友人への感情・欲求, 友人間でのサポート授受を独立変数, 学校適応感の各項目群を従属変数とした重回帰分析(stepwise法)を行った。相関分析で

学校適応感の各項目群と有意な相関が見られた項目群を独立変数として投入したところ, 「信頼・親しみ」と「受けているサポート」が, ほとんどの学校適応感の項目群と有意な正の関連を示した。

さらに, 学校適応感を潜在変数としたパス解析による検討を行った。全体・男女別のいずれにおいても, 「信頼・親しみ」が学校適応感に直接的にも, 「受けているサポート」を介して間接的にも有意な関連を示した。適度な適合性が示されたパス図を図1に示す。[ $\chi^2(df=32, N=782)=161.288, p < .001, CFI=.962, TLI=.922; RMSEA=.072(.061-.083)$ ] 一方, 「提供しているサポート」については, 明らかな関連が見られなかった。

このことから, 中学生の学校適応にとって, 友人に対する「信頼・親しみ」, 「受けているサポート」が, 特に重要であることが, 再確認された。

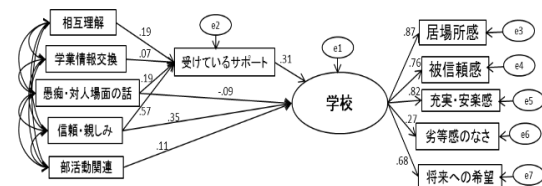


図1. 中学生における友人とのコミュニケーション, サポートの授受, 学校適応に関するパスモデル

また, 男女で「受けているサポート」に関連していた友人とのコミュニケーション・活動, 友人への感情・欲求の内容に差異が見られたことから, 性別によってサポートを受けている感覚に関連しているコミュニケーション・活動に特徴があることが示唆された。

### 総合考察

本研究において, 中学生が友人の相談に乗るまでのプロセスと, それを基盤にしたコミュニケーションとサポートの学校適応感との関連について検討し, 中学生は友人との日頃のコミュニケーション, 付き合いの工夫などにより培った友人との信頼感と, 友人からサポートを受けているという感覚が, 学校における適応感を高めていると考えられた。

### 主要引用文献

周玉慧・深田専巳 (1996). ソーシャル・サポートの互恵性が青年の心身の健康に及ぼす影響. 心理学研究, 67, 1, 33-41